

【氏名】 尾崎 由佳

【所属大学院】（助成決定時）東京大学大学院 人文社会系研究科

【研究題目】

制御焦点が自己関連情報への選択的注目に与える影響

—日本人はなぜ自分のネガティブな側面に目を向けるのか—

【研究の目的】

日本人はネガティブな自己関連情報（自己概念、自伝的記憶など）に注意を向けやすく、また重要視しやすいという。これは、ポジティブな自己関連情報に注目しやすい傾向をもつ欧米人とは対照的である。なぜこのような文化差が生じるのだろうか。本研究は、日本人も欧米人と同様に「ポジティブな自己観を達成する」という目標を持っているが、目標追求の方略が各文化で違っているために、異なった自己関連情報を利用するのだろうと考えた。制御焦点理論(Higgins, 1998)によれば、同一の目標を達成するために、2つの異なった方略的傾向が存在するという。すなわち、促進焦点と予防焦点である。促進焦点とは目標への一致に接近するような方略傾向であり、予防焦点とは目標との不一致を回避するような方略傾向である。そして、人間はその方略的傾向に応じて、異なった種類の情報に注目しやすくなるという。この理論をふまえると、ポジティブな自己観達成という同じ目標を持ちながら、欧米人と日本人が異なった自己関連情報に注目するという現象も、制御焦点の違いによって説明できるのではないか。このような着想にもとづいて、ポジティブあるいはネガティブな自己関連情報に対する注目のかたよりを規定する要因について検討を行った。

【研究の内容・方法】

制御焦点理論によれば、促進焦点が強い場合は「何をすれば良い結果が得られるか」を示唆する情報に注目し、予防焦点が強い場合は「何をしなければ悪い結果を避けられるか」を示唆する情報に注目するという。この理論を自己認知にあてはめると以下ようになる。ポジティブな自己関連情報は良い結果を得るために利用すべき属性や行動を示唆し、ネガティブな自己関連情報は悪い結果を避けるために抑制すべき属性や行動を示唆している。したがって、促進焦点はポジティブな自己関連情報への注目を高め、予防焦点はネガティブな自己関連情報への注目を高めるだろうと予測した。

研究1 評価的フィードバックの認知に与える影響

参加者はシナリオを読み、自分の性格や能力について他者から肯定的なコメント(e.g.褒め言葉)や否定的なコメント(e.g.批判)を受けるという場面を想像した。つづいて、コメントを受けた属性がどの程度重要なものであるかを評定した。制御焦点の個人差との相関研究(研究1a)では、促進焦点が強い人ほど肯定的コメントを受けた属性を重視し、予防焦点が強

い人ほど否定的コメントを受けた属性を重視することが示された。制御焦点を実験的に操作した研究（研究 1b）では、予防焦点が喚起された群は、促進焦点が喚起された群よりも否定的コメントをうけた属性を重視することが示された。

研究2 自伝的記憶の想起に与える影響

参加者は、自分が過去に経験した「良い結果を得られたこと（促進肯定経験）」「良い結果を得られなかったこと（促進否定経験）」「悪い結果を避けられたこと（予防肯定経験）」「悪い結果を避けられなかったこと（予防否定経験）」のいずれかを思い出すよう教示され、その想起の容易さを評定した。促進焦点が強いほど促進肯定経験を思い出しやすく、予防焦点が強いほど予防否定経験を思い出しやすいことが示された。

研究3 自己概念の活性化に与える影響

参加者は、さまざまな肯定的・否定的属性について、自分があてはまるかどうかを評定した。評定パターンを検討した研究（研究 3a）では、促進焦点の強い人ほど自分は肯定的属性にあてはまると答えやすく、予防焦点の強い人ほど自分は否定的属性にあてはまると回答していた。反応時間測定を用いた研究（研究 3b）では、促進焦点を喚起されると肯定的属性への「あてはまる」反応が速くなり、予防焦点を喚起されると否定的属性への「あてはまる」反応が速くなったことから、各属性の活性化が高まっていたことが示された。

【結論・考察】

研究 1～3 を通じて仮説を支持する結果が得られた。すなわち、促進焦点が肯定的な自己関連情報への注目を高め、予防焦点が否定的な自己関連情報への注目を高めることが示された。

促進焦点と予防焦点は、両者とも「ポジティブな自己観」を目標としている点で共通である。にもかかわらず、それぞれの方略的差異に応じて、前者はポジティブな自己認知をもたらし、後者はネガティブな自己認知をもたらす。言い換えれば、人々が自分自身をポジティブな面に注目したりネガティブな面に注目したりするのは、目標とする自己観がそもそも違うのではなく、その自己観をどのように追求するかという方略の違いが影響していることが示唆された。

欧米文化では促進焦点が、東アジア文化では予防焦点が優勢であるという(Lee, Aaker, Gardner, 2000)。これを本研究の結果と併せて考えると、欧米人がポジティブな自己認知をするのは促進焦点が強いためであり、日本人がネガティブな自己認知をするのは予防焦点が強いためと説明できる。ただしこの説の検証には、複数の文化からデータ収集を行う比較文化研究が必要であり、今後の課題として計画中である。

本研究の知見は、日本人に特徴的なネガティブな自己認知傾向の原因解明という学術的意義を持つとともに、文化間の相互理解と人間関係の維持・形成、さらに国際的ビジネス場面での円滑な交渉や相互協力のために大きく貢献するものである。